

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6 月 21 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02986

研究課題名(和文) 東国における初期仏教文化の導入と展開

研究課題名(英文) Introduction and expansion of early Buddhist culture in the east country

研究代表者

酒井 清治 (SAKAI, KIYOJI)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：80296821

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：武蔵国の仏教伝来は、滑川町寺谷廃寺創建に始まるが、東日本の中でも最も早く7世紀前半であった。7世紀後半には東松山市大谷瓦窯跡で棒状子葉軒丸瓦が生産されたが、いまだ供給先は判明していないが、同系の軒丸瓦が南比企丘陵窯跡群赤沼窯跡で焼成され、坂戸市勝呂廃寺の創建瓦となった。この棒状子葉軒丸瓦は、比企郡南部から入間郡北端部に分布するのは、物部系の氏族との関連が考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東日本の仏教伝来は、考古学資料から7世紀前半の630年代以降と結論づけたが、その地は古墳や官衙等のない地域であった。そこに寺院を建立したのは物部連(直)兄麻呂と想定した。その後当地に棒状子葉軒丸瓦という特徴ある瓦当文が分布することから、地方の仏教受容の過程を明らかに出来た。また、勝呂廃寺の瓦を継続して生産した南比企丘陵窯跡群は、古代において関東最大の窯跡群に発展する端緒となっており、新来の文化導入が地方発展に結びついた事例である。

研究成果の概要(英文)：The Buddhist tradition of Musashi country begins in Namegawa-machi Terayatu (寺谷) Abandoned Temple, but it was the first half of the 7th century among the eastern Japan. In the late 7th century, round-shaped roof tiles was produced at the Ooya(大谷) kiln of tiles of Higashi-Matsuyama City, but the supply destination has not yet been determined. The same kind of round-shaped roof tiles was fired on the south Hiki hills ruins group Akanuma(赤沼) kiln of tiles, and it became a founding tile of Sakado city Suguro(勝呂) Abandoned Temple. This round-shaped roof tiles is distributed from the southern part of Hiki-gun to the northern end of Iruma-gun may be related to the Mononobe(物部) genealogy clans.

研究分野：考古学

キーワード： 仏教文化 初期寺院 寺谷廃寺 大谷瓦窯跡 棒状子葉軒丸瓦 勝呂廃寺 7世紀後半 南比企丘陵窯跡群

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 平成 23 年～26 年の科研で、それまで 6 世紀末、あるいは 7 世紀後半といわれた滑川町寺谷廃寺の創建年代を、630 年代以降で 7 世紀第 2 四半期におさまると考えた。創建に関わったのは、『聖徳太子伝暦』に見られる武蔵国造になった物部連(直)兄麻呂と想定した。
- (2) 寺谷廃寺の素弁軒丸瓦と比企郡に分布する棒状子葉軒丸瓦との関係について、検討が不十分であった。そのため東日本最古の寺院が作られているものの、その後どのように展開していったか不明確であった。

2. 研究の目的

- (1) 滑川町に東日本最古の寺谷廃寺が建立されたものの、その後どのように寺院が展開していったのか探ろうと考えた。関東の群馬県では山王廃寺が、千葉県では龍角寺が 7 世紀後半に創建され、その後もそれぞれの地に寺院の建立されていった。しかし、埼玉県では 7 世紀前半に寺谷廃寺が建立されたものの、その後 7 世紀後半(7 世紀第 4 四半期)まで寺院の建立が確認できず様相が不明確であることから、どのように寺院が存続したのか検討する。
- (2) 具体的には寺谷廃寺の瓦の再検討を行い、その後に出現する大谷瓦窯跡出土瓦の技法の分析、勝呂廃寺の文様と技法の分析と変遷から地方の仏教文化の展開を探ろうとした。また、勝呂廃寺に供給した南比企丘陵窯跡群の赤沼瓦窯跡の瓦も技法、文様、胎土を分析し、勝呂廃寺の瓦と比較検討を行う。

3. 研究の方法

- (1) 寺谷廃寺の瓦で胎土分析のために未実測であった瓦の実測・拓本の資料化と素弁軒丸瓦の系譜の検討を行う。これまでも寺谷廃寺の瓦は実測を行ってきたが、未実測を含めることにより、寺谷廃寺の出土瓦すべての資料化をめざす。
- (2) 最初に棒状子葉軒丸瓦を焼成した大谷瓦窯跡出土瓦、周辺出土瓦の理化学的胎土分析を行い、大谷瓦窯跡の瓦を分析から明らかにすると共に、東松山市周辺の出土瓦の需給関係を明らかにする。
- (3) 勝呂廃寺出土瓦の時期区分を行い、出土瓦の理化学的胎土分析を進める。
- (4) 勝呂廃寺の発掘調査を行い、考古学的に勝呂廃寺の解明の糸口を見つけ、創建に関わった勢力と寺院跡の解明に向け情報を収集する。

4. 研究成果

- (1) 寺谷廃寺出土瓦の集成は完成したが、系譜が飛鳥寺系か百濟直系か細部の手法の比較が十分に出来ず断定できなかった。しかし、滑川町が継続して寺谷廃寺の調査を行ってきたが、寺院跡など遺構や出土瓦なども検出できなかった。そのため、科研で行った資料集成は寺谷廃寺を検討する上に重要な資料となろう。
- (2) 東松山市埋蔵文化財センターの協力を得て、大谷瓦窯跡出土瓦の胎土分析を行った。分析結果を以前分析した寺谷廃寺・平谷窯跡・羽尾窯跡と照合した。その結果、大谷瓦窯跡は平谷窯跡・寺谷廃寺の瓦と羽尾窯跡の須恵器とは領域がやや異なることがわかり、大谷瓦窯跡と平谷窯跡・寺谷廃寺は、それぞれ生産地と供給先が異なることが判明した。
- (3) また、東松山市内の出土瓦も一緒に提供していただき、胎土分析を行った。その結果、資料の中に複数の平行叩きを持つ瓦については、南比企丘陵窯跡群のデータと近いことが判明し、肉眼的観察でも確認できた。東松山市内にも勝呂廃寺 期の瓦が南比企丘陵窯跡群から供給されているようで、古代氏族の広がりに関わると想定できる。
- (4) 鳩山町教育委員会から赤沼窯跡の出土瓦を借用し検討を行ったところ、長斜格子叩き、長格子叩き、平行叩きを持つことから、勝呂廃寺の瓦の供給先と確認できた。
- (5) 勝呂廃寺初期の棒状子葉軒丸瓦は、蓮華文が 12 葉、10 葉、8 葉の 3 種があるが、鳩山町赤沼窯跡から 12 葉と 8 葉の軒丸瓦が出土しているが、瓦当文と丸瓦の接合方法が異なる。12 葉は瓦当文背面を弧状に指で窪ませて丸瓦を差し込むのに対して、8 葉は瓦当背面を平坦にしたところに丸瓦を接合することから、12 葉軒丸瓦のほうがより古い技法といえよう。また、弁の横断面が丸みを持つ 12 葉、10 葉と、弁の中央に鎬状に稜を持つ 8 葉の違いがあり、中房の高さはほとんど無い後者が新しく 期と考えた。また、10 葉は横断面が 12 葉よりも高まりがあり、子葉が東松山市大谷瓦窯跡と同様長く、弁端も桜花状につくり精緻であることから、10 葉 12 葉 8 葉の変遷を考え、10 葉を 期、12 葉を 期から 期の過渡期、8 葉を 期と想定した。
- (6) 赤沼窯跡と勝呂廃寺の桶巻き作りの丸瓦と平瓦は、変形長格子と長斜格子叩きが長さ 42.0～42.5 cm で平均 42.3 cm であったが、平行叩きが 37.2～41.5 cm で平均 38.6 cm と、前者が長く大きい。また、桶巻きの桤板痕も変形長格子と長斜格子叩きの瓦は、2.0～3.4 cm で平均 2.6 cm であったが、平行叩きは 1.7～3.0 cm で平均 2.3 cm と、前者の方が桤板痕の幅が広く、古い様相を持つことが分かった。すなわち、 期の 10 葉と 12 葉軒丸瓦に主に変形長格子と長斜格子叩きが伴い、 期の 8 葉軒丸瓦に平行叩きが伴う可能性が高い。
- (7) 勝呂廃寺の出土瓦から時期区分を行い 5 期に区分できた。 期：7 世紀第 4 四半期、 期：7 世紀末～8 世紀初頭、 期：8 世紀前半、 期：武蔵国分寺創建期、 期：武蔵国分寺塔再建期。渡辺一氏は 期の棒状子葉軒丸瓦の前に、石田 1 号窯出土の平瓦を創建 1 期と考えたが、

が必要である。なお、入間郡には769年西大寺に墾田、林、商布、稻などを献上した大伴部赤男がいたが、その関係については検討できなかった。

勝呂 期の国分寺建立期は、南比企丘陵窯跡群で上野国佐位郡上植木廃寺の一本造り軒丸瓦を生産し、武蔵国分寺の創建初期の建物に使用した。この武蔵国分寺1期の瓦は上野系軒丸瓦である。また続く武蔵国分寺2a期の創建段階の瓦も南比企丘陵窯跡群で焼成し、国分寺に供給するとともに勝呂廃寺にも使用された。このように、武蔵国分寺創建にあたっては、南多摩窯跡群とともに南比企丘陵窯跡群の果たした役割は大きく、それを主導したのは勝呂廃寺を建立した入間郡司であった物部直広成の家系であろう。その後も勝呂廃寺 期、武蔵国分寺塔再建期にも、入間郡の東金子窯跡群とともに南比企丘陵窯跡群でも瓦生産を行い、国分寺、勝呂廃寺で使用されていることから、9世紀中葉までは法灯を守っていたようである。しかし、南区画溝の堆積からみるに、窪みが確認できる程度埋まっていたようであるが、終焉は確認できていない。

(16) まとめとして、東日本で大きな古墳のない地域に最初に寺谷廃寺を造営したことは、在地首長と関わりがないことから、その建立者を武蔵宿禰となった物部連(直)兄麻呂と考えたが、なぜ滑川の地を選んだのであろうか。

7世紀第3四半期に、東北へ4.2kmの有階有段の大谷瓦窯跡で瓦を焼成したことは、東方に棒状子葉軒丸瓦を葺く寺院が存在したためであろう。大谷瓦窯跡は東山道武蔵路の西側に近接するが、武蔵路を南下した勝呂廃寺北には、武蔵路から分かれて北北東に向かう西吉見古代道路跡が確認されている。この道沿いの南側には比企郡家推定地(寺谷廃寺から南東約9km)が、北側には横見郡家推定地(寺谷廃寺から東へ約7.5km)がそれぞれ近接する。また、横見郡は安閑紀に見られる武蔵四處の屯倉の一つである、横渟屯倉推定地とされる。武蔵路から分岐する西吉見古代道路跡の延長には埼玉古墳群、若小玉古墳群があることから、武蔵路からの分岐点付近は交通の要衝だったと考えられる。7世紀前半の寺谷廃寺、7世紀第3四半期の大谷瓦窯跡から瓦を供給した寺院が、この付近に継続して造営されたことは、何らかの官衛的施設が存在したためであろうが、寺谷廃寺は評の設置よりも遡ることから、横渟屯倉の殖産事業として、羽尾窯跡、平谷窯跡の操業や寺谷廃寺の造営がなされた可能性もあろう。

素弁軒丸瓦から棒状子葉軒丸瓦の広がり、物部連(直)兄麻呂から物部直広成の物部勢力下で起こった当地の仏教文化の広がりといえよう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

酒井清治、総論 土器からみた渡来人研究、考古学ジャーナル 査読無、711号、2018、3-4、

酒井清治、古墳時代における古墳と窯跡の須恵器、季刊考古学、査読無、142、2018、14-17

酒井清治、須恵器生産、季刊考古学、査読無、137、2016、27-31

[学会発表](計1件)

酒井清治、生産の考古学 窯業、日本考古学協会第85回総会、2019、

[図書](計6件)

酒井清治 他、府中市、新府中市史 原始・古代資料編1 考古資料1、2019、343(272-273・275-276・280・284・290・298・309・314)、

酒井清治 他、ニューサイエンス社、古瓦の考古学、2018、297(213-232)、

酒井清治 他、埼玉県教育委員会、埼玉古墳群出土の須恵器について、2018、332(169-192)、

酒井清治 他、雄山閣、積石塚大全、2017、332(278-286)、

酒井清治 他、芙蓉書房出版、考古学・博物館学の風景、2017、542(133-150)、

酒井清治 他、同成社、日本古代考古学論集、2016、679(424-438)、

[その他]

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。